

り新鳥越の橋へ漕入る、鹽のなき時は橋より手前からおりて、山の麓を歩行にて行く、山の茶屋から知る人の見ることもやとて、熊谷笠をふせてかぶり、略下

〔洞房語園集上〕日本堤謠

明曆丁酉の年三元の吉原を此所にうつされて新吉原といふ、略中 熊谷笠は深く、八所緘は淺

し、いづれも面を覆ふが中に、額際揉あげの髭自慢に、屹として素顔なるもありけり、

〔我衣〕網代笠、古來ヨリアリ、竹ヲアミタルナリ、但澀ニテハキ漆ニテ止メタルモアリ、大方白ナリ、

僧ノカムルモノナリ、天和ノ比ヨリ上方ヨリ下ルナリ、

網代バリトテ、フチヲ反シタル笠ナリ、杉形ヨリ二三年オソシ、御小身衆馬上ミナ是ナリ、御納戸

衆御扈從衆多シ、皆赤ヌリ、延享ヨリ陪臣モコレヲ用ユ、

〔守貞漫稿笠二十九〕竹網代笠、略圖

古來僧尼用之、澀ヌリ漆止メアリト雖ドモ、素ヲ専用トス、或書曰、天和以來、大坂ヨ三都トモニ僧

尼用之也、此形僧尼ノミナリシガ、嘉永五六年ヨリ葛笠、蘭ガラ笠ニテ此形ヲ造リ、風流ノ徒用之、

〔運歩色葉集阿〕綾蘭笠

〔倭訓栞中編一〕あやむがさ 綾蘭笠と書り、文あるをいふ、今の熊谷がさの類、山伏の笠にもいへ

り、

〔嬉遊笑覽器中〕蘭笠は、略中 蘭は和名抄にると訓り、疊の表に織る草なり、これを編作る故、綾の笠

といふ、

〔武家當時裝束抄行粧具〕臺笠中略いにしへは、綾蘭笠とて、檜又蘭にて作る事、古畫に見へたり、是

登城の時、限るよし也、

〔玉函叢説一〕綾蘭笠狩場笠の事